

【事業実績】

本プロジェクトでは、港区という都市における「社会の変化によるコミュニティの分断」と「多様な地域文化資源に根ざした文化活動をつなぐコミュニティの不在」という二つの課題に対して、文化の継承と時代に即した更新、そして社会への再接続を担うミュージアムの機能を強化するモデルを提示することによって対応することを目指して活動を行っている。2022年度は、3つの軸の元に活動を展開した。

1. 包摂的な文化体験の創出

価値観の異なるコミュニティのメンバーが地域文化資源を活用した文化体験にともに参加し、体験を共有することを通じて、コミュニティのゆるやかな接続を図るためのプログラムを3種実施した。

視覚障がいを持つ参加者と一般の参加者が文化体験の機会を共有し、包摂的な文化体験について実践の中で考えるワークショップの企画においては、自然科学系の機関として東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムと連携し、また伝統文化の担い手として増上寺と連携し、「マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ&ぶらぶら対話ツアー」（参加者：20名）「インクルーシヴを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える」（参加者：12名）を開催した。

参加者からの声 初めて出会った方と、初めての場所に訪れ、ひとつの対象について、それぞれの角度から話す、それで、他の方の知識や感想も聴く、ということがとても貴重な体験／職場や学校、地域でも取り入れられる、大切なコミュニケーションの形だと感じた／参加者の皆さんは声が大きく積極的に発言する人が多かったので、声が小さい自分ではなかなか発言できないのは残念だった／障がいの度合いは個人で違うので、いろいろな立場でのお話しが聞けて良かった／日中仕事をしている人が参加できるようにしてほしい



マリンサイエンスミュージアム ツアー



インクルーシヴを語る会



インクルーシヴを語る会

また、新旧コミュニティの融合を図るプログラム実践の試みとしては、地域の記憶と文化について「写真」を切り口に実践を通じて学ぶラーニング・ワークショップ「コレクティヴ・メモリー」（全3回、のべ参加者数：36名）を開催した。また、包摂的な文化体験をサポートするコンテンツとして、連携館のパンフレットの点字翻訳（1種）を行ったほか、ワークショップの内容を現場の目線から振り返り、さまざまな課題や、これからインクルーシヴ・プログラムの導入を行う機関のヒントになる情報を纏めた教材冊子（300部）を作成した。

参加者からの声 毎回ワークショップをやるのが良かった。NOTIONも今回の講座がないと使うこともなかったと思うので勉強になった／港区の建築写真を撮ることで、自分の港区との関係、さまざまなはじまりを意味していたことを再確認した／年齢国籍男女、色々な背景の方がいて、発見があった

2. 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップの開催

様々な領域の地域文化資源を可視化し、その活動や担い手をつなぐこと、そして異なる世代の異なる関心をもつ参加者が出会い、多様な価値観を受け入れる場を作ることを目的として、ラーニング・ワークショップを4種開催した。

港区の街に散りばめられた文化財を認識してもらい、文化財にあふれた地域の本来の姿とその魅力にフォーカスする企画「日常の風景に文化財を観る：地域の彫刻と建築を学ぶワークショップ」では、普段非公開の建築を公開する「建

築公開日」(参加者数:403名)、彫刻・建築それぞれの専門家を招いて文化財を実見しながら紹介する**建築・彫刻ツアー**(のべ参加者数:29名)を開催した。

参加者からの声 台座の上であり目線が届かなかった彫刻を説明を伺いながらよく見てみることで文化財としての価値を認識した／以前より野外彫刻に興味を持っていたが、どのように見たらいいのかわからずいた。今回の講座で、作品の背後にある歴史や技法、材料なども学ぶことができ、とてもよかった／文化財は身近にあり、人知れず関係者が大事に守って来たお蔭で日本の文化の歴史を伝えていると感じた／地域の古い建築や彫刻が文化財であることを、ある時点で明確にすべきだと感じた／身近にあっても価値を知らずにいる建築がたくさんあるのではないかと感じ、もっと地域の建築について知りたくなった



建築ツアー

「地域の寺院を訪ねる:寺院の文化財と現代における活動を学ぶワークショップ」(参加者数:17名)では、江戸時代からの文化財を継承する寺院の文化や現代における活動を学ぶことを目指した。

参加者からの声 お寺の方からお話が聞けて良かった／仏教の言葉や文言はむつかしく、解説があり理解の助けになった。それでも難しい／普段、個人では訪問しないような所を訪問することができた／2017年から続いている大学との交流が、このような信頼関係を築いてきたのではないかと



彫刻ツアー

3. 文化財に触れる:「オブジェクト・ベスト・ラーニング」ワークショップの開発と開催

学び手がオブジェクト(=文化財)と直接出会うことによって、文化財と自らの繋がりを深めるとともに、文化財を通じて他者と対話する「オブジェクト・ベスト・ラーニング(OBL)」の実践を地域の文化資源を対象に展開することをめざし、ワークショップのプログラム開発と実践を行った。OBLの基本的な方法論を確認するとともに、地域文化資源へ展開する手法や課題について検討するワーキング・グループ(2回、参加者数:13名)を実施したほか、一般向けのプロトタイプ・プログラム「文化財への新しいアプローチに触れる1dayプログラム:『オブジェクト・ベスト・ラーニング』入門」(参加者数:15名)を開催した。

参加者からの声 作品を見ていくステップ(OBL)が明確になり、知人友人にもすすめたいと思った／First time witnessing OBL in practice, with lecture's help I get to understand the charm of OBL, and how to practice it with a proper flow. I have learned a lot.／実際に本物の作品を普段見ることのできない距離で見ることができた／普段1つの作品をこれほど時間をかけてみることに無いので、とても貴重な良い時間になった／作品を見方や感じ方の個人差を、本人の言葉で聞くことができた／展示のあり方についても考えるきっかけになった



『オブジェクト・ベスト・ラーニング』入門

また、同様の実践を志す文化財・教育関係者のための参考資料とするため、ワーキング・グループおよびワークショップの映像記録を編集しアーカイブ化した(3本)。また、ワークショップの実践とWGでの検討の要旨をまとめた**報告書(100部)**を作成した。

4. プロジェクトの運営・モデル化

プロジェクト運営のための実行委員会会議を1回開催し、プロジェクトの活動内容について、推進の方法や企画内容、予算、各連携機関の分担について確認した。

また、プロジェクトの成果とモデルを広く共有するため、**全体報告書(300部)**を作成し、ウェブサイトでも公開を行った。